GINZADORI SHOTENGAI

歴史文化に根づく街づくり。
まちづくり会社との連携で、次世代へバトンを。

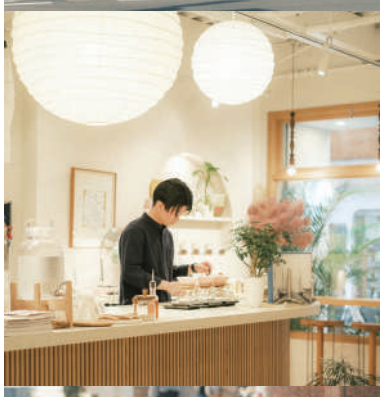
銀座通り商店街

名鉄瀬戸線の終着駅「尾張瀬戸駅」から徒歩3分。瀬戸市の中心部にある３つの商店街のひとつ、銀座通り商店街活性化の最初の契機になったのは、2005年の愛知万博でした。歴史文化「せともの」に根ざした街づくりへと舵を取るとともに、今もなお残る「新しいお店を開くことが何よりも商店街の活性化につながる」という信念を確立し、商店主たちの気持ちがひとつに。その後もまちづくり会社と連携しながら常に現状と課題を見つめ、次世代へとバトンをつないでいます。

愛知県瀬戸市朝日町 周辺

事例集は「あいち商店街空き店舗情報ナビ」でもご覧いただけます

発行：愛知県経済産業局中小企業部商業流通課／企画：株式会社ナゴノダナバンク



1887頃　**深川神社の門前町として栄える**

昭和17年頃の朝日町通り
（出典元：瀬戸市制50周年記念誌）

瀬戸の産土神と言われる深川神社（771年創建）の門前町として、明治20年頃から商家が立ち並んだのが始まり。瀬戸街道沿いに生まれた宿場町、瀬戸物の集散地として問屋町として自然発生的に商業が栄えた。

明治時代から大正時代にかけて「瀬戸へ行かんでどこへいく」と言われたほど活気あふれる商店街で、瀬戸へ行けば仕事があると多くの人が農村から瀬戸へ移り住んだ

1929　**瀬戸市が誕生**

戦後、陶磁器産業の隆盛とともに発展していく。“銀座通り”は地場産業の陶磁器が栄えた頃、宮前発展会ともども一番の繁華街であった所から付けられた。高度成長期以降は、日常の買い物から娯楽まで、人々が「楽しい」を求める場所となり、映画や食事を楽しむ人々で賑わった。

1964　**アーケードが完成**

最盛期を迎える

左：アーケード完成時（出典元：瀬戸市制70周年記念誌）
右：最盛期の銀座通り商店街（出典元：瀬戸市制50周年記念誌）

1968　**銀座通り商店街振興組合設立**

昭和50年代に総合スーパーが瀬戸へ進出。瀬戸の商業の中心が移り変わり、徐々に商店街の活気もなくなり、苦悩の時代に突入。

1997　ターニングポイント

2005年万博開催決定

2005年長久手市・瀬戸市での「万博開催決定」を受けて、様々な取り組みが始まる。

取組成果

1998年、やきもの文化に根ざした潤いのある街づくりという「瀬戸らしさ」を大切にした基本計画を作る。また、商店街の女性部として「ギンザ・レディース会」が立ち上げられた。イベントを通じての学生や市民団体との連携も始まった。

縁日開催！

1999　**瀬戸まちづくり株式会社設立**

「せともの文化」のイメージを確立させ、商店環境の活性化、将来にわたる地域経済の再構築を目的に設立された。

2001　取組成果

「銀座茶屋」カフェ＆雑貨「マイルポスト」開店

商店主の若手有志と名古屋学院大学の学生たちにより、地域の人々の憩いの場「銀座茶屋」と、カフェ＆雑貨「マイルポスト」が開店。こうした大学連携によるまちづくりの成果が認められ、中小企業庁の「がんばる商店街77選」に選ばれた。

銀座茶屋（写真提供：銀座通り商店街）

「銀座茶屋」は地域のコミュニティサロン。異世代間の交流の場として多くの地域の人たちに利用され、役目を終えて2014年に閉店

波及効果 店舗オープン

「かわらばん家」開店

「銀座茶屋」オープンを皮切りに空き店舗にギャラリーや飲食店がオープン。一店逸品づくり運動による既存店の活性化とネットワークを活かした商店街の新たな魅力作りを進めるようになる。

空き店舗のシャッターを利用して対局の実況をする「シャッター大盤」が藤井竜王の活躍で注目される

2005　**愛・地球博開幕**

愛・地球博を契機に、商店街活性化の機運が高まり、学生や芸術家、NPOの人たちがまちづくりに参加。飲食店やギャラリー、陶器の店が増え、近年は若手創業者の店舗が相次いで開店。

愛・地球博当時の商店街
（写真提供：銀座通り商店街）

2014　**アーケードが新しくなる**

この頃「日常の商売を大切にする」という考えでイベントをやめる決断をした。イベントよりも、１店舗開店することが活性化になり、各自の商売が元気であることが大切だと再確認。

日常でちゃんと稼ぐ！という視点は５年ほどかけて商店街みんなの共通認識となった（河本理事長）

2016　波及効果 イベント実施

「銀座なんでも生き生きマルシェ」スタート

NPOが毎月第1日曜に開催。

八冠タイトル獲得の際は、たくさんのお客さんが商店街に来て、ここ数年稀にみる盛り上がりだった（河本理事長）

2023　取組成果

３商店街合同マーケット「SAN MA」スタート

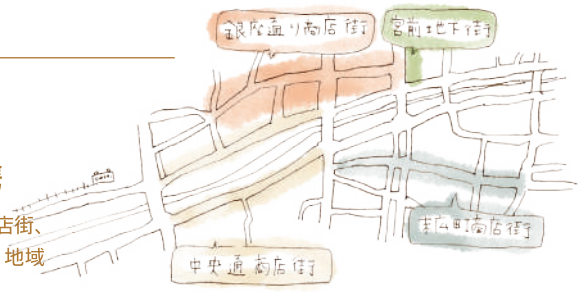
まちづくり会社は24年間に銀座通り商店街に計15件店舗（現在営業中）を誘致。第３世代の若手たちが近隣３商店街合同のマーケット「SAN MA」を開催。

まちづくりが前面に出ると商売じゃない感じがする。イベントやるからには儲からないと！（本田さん）

今後の課題

・これまで人に貸したことのない店舗が世代交代で空き店舗や住居になるかもしれない
・イベントと商売のバランスと継続性を模索していく必要がある
・地域の住民が定期的に来るような店舗が少ない

５年10年先を見据えてコミュニケーションを取り合い商店街を維持していく



行政×商店街×まちづくり会社の連携

瀬戸市の中心市街地には、銀座通り商店街のほか、中央通商店街、末広町商店街があり、行政やまちづくり会社と連携しながら、地域一体となって活性化に取り組んでいます。

愛知万博をきっかけに、「瀬戸焼のまち」を意識

＞＞河本理事長

商店街活性化の流れは、愛知万博（2005年開催）前にさかのぼります。万博自体は、商店街に直接影響があるものではないと思いましたが、これをきっかけに商店街で話し合い、まず1998年に商店街活性化の基本計画を策定し、「やきもの文化に根ざした潤いのある街づくり」というスローガンを打ち出しました。実は瀬戸焼の街ということを意識したのは、このときが初めてです。私は生まれも育ちも瀬戸で、お茶を販売する店の３代目ですが、当時、周りに瀬戸物屋さんは一軒もなく、ずっと瀬戸に暮らしている自分でも、ごく普通の地方都市の中心商店街という感覚でした。愛知万博を機に、自分たちのまちを見直して、商店街にも瀬戸らしさを取り入れて行こうと、みんなで方向性を共有できたのが大きかったです。翌年には瀬戸まちづくり株式会社が設立され、銀座、末広、中央という中心市街地の３商店街、まちづくり会社、行政という３者の連携が生まれて、愛知万博に向けた機運が高まっていきました。

まず取り組んだのが、「ギンザ・レディース会」の立ち上げと、レディース会による縁日の開催です。ちょうどブームになった女将さん会の先駆けのようなもので、女性部の取り組みに「名古屋学院大学」の学生さんたちが協力してくれて、イベントを通じて学生や市民団体とのつながりができました。賑わい創出のためのイベントをやっていくうちに、イベントは一時的な人出を生むけれど、商店街にとって一番活性化になるのはひとつのお店を開けることだと気づきました。そこで商店街有志の呼びかけで出資を募り、学生の協力も得て、当時組合事務所として使っていた空き店舗で2001年に「銀座茶屋」を開店。同じ年に、名古屋学院大学が授業の一環で、「銀座茶屋」の隣にまちづくりカフェをオープンさせて、大学生が経営するカフェと瀬戸土産のセレクトショップ「マイルポスト」に発展しました。これが大学と商店街の連携ということでかなり話題になったのと、「銀座茶屋」は１人がポンとお金を出したのではなく、立ち上げから運営までみんなで協力してやったことがいい経験になって、まち全体で空き店舗対策に本腰を入れる流れができたと思います。

＞＞野杁さん

また同年には、アーケード入り口にあった活版印刷所が閉まった後の建物を改装して、ギャラリーとカフェ併設の「かわらばん家」をまちづくり会社が直営でオープンしました。木造２階建ての古風な建物で、１階は若手からベテランまでの陶芸作家や窯元の作品を常設し、２階は企画展スペースにして、賑わい回復とともに、若手作家の発表の場としても重要な拠点となりました。現在はサブリース事業として、「かわらばん家」の役目を受け継ぐ形で「綱具屋SETORe（ツナグヤセトリ）」が営業しています。

商売の主役だけでなく
周りのサポートが手厚いのが強み

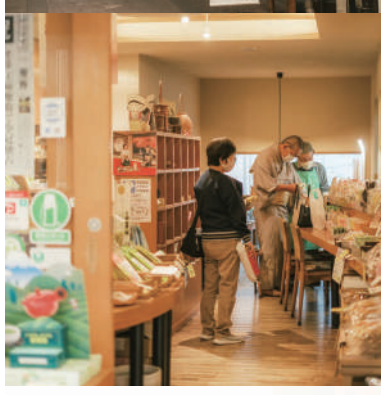
野杁晃輔さん
瀬戸まちづくり株式会社
ディレクター

店が一軒開くことが
商店街にとってすごい力になる

河本篤さん
お茶屋「お茶彦」店主
で商店街の理事長

ものづくりの街ならではの
魅力をもっと発信していきたい

本田順也さん
little flower coffee 店長



いつもの暮らしを大切にする人に寄り添う商店街に

＞＞河本理事長
愛知万博の前後が第一次の活性化だとすると、第二次活性化は、2008年に和食器や雑貨「かめりあ」、2013年～15年頃にセレクトショップ「noveRuga」、「ナカイガラス制作所」（現在は移転）、中国雑貨「華蔵」など、当時30代くらいの元気な店主さんたちが商店街に来てくれたことです。2014年に新しいアーケードが完成して雰囲気が明るくなったところに、若手創業者の垢抜けたお店がポンポンとできて、まちが華やぎました。いまちょうど10年くらい経って、彼らがメインになって銀座通りを盛り上げてくれています。とくに瀬戸出身の藤井聡太さんをみんなで応援しようと、「noveRuga」の飯島さんが始めた”シャッター大盤”は大きな話題となって、対局の度にテレビでも報道され、銀座通り商店街の認知度を飛躍的に高めてくれました。前人未到の八冠を取ったあとの数日は、まさに僕らが夢に見た商店街の光景。平日にも関わらず、ものすごい数の人が商店街を目的に来てくれて、くす玉や手描きの垂れ幕を写真に撮って、テレビで見たあの店この店と、買い物を楽しんでいました。平日でもこんなに人が来てくれるんだ、というのが衝撃で、しかもそれほど遠いところからではなく、1時間圏内くらいの人が多く、久しぶりに来てくれる地元の人も多かったです。これを日常にしたいと思いましたし、その可能性はあるんだ、と感じられる経験でした。

＞＞野杁さん
まちづくり会社でも2017年から３年間、３つの商店街の空き店舗を使ったチャレンジショップ事業を展開して、その１号店が銀座通りにできたご当地グルメ・瀬戸焼そば店「りえの焼きそばチントンシャン～ぱんだ家～」です。はじめの半年から１年は空き店舗を低額で貸し出すことで、これからお店を始めたい方が実践的に学べる場を提供し、チャレンジ期間終了後は独立を支援。中心市街地の銀座通り、末広町の２商店街で３つのお店がチャレンジショップをきっかけに誕生し、現在も営業を続けています。また、「かわらばん家」、「ギャラリーもゆ」に続き、2018年に地元食材を使った料理を瀬戸焼の器で提供する「Cafe＆Guesthouseもやいや」をオープン。一方で作家さんたちも、「Artwalkホウボウ」と銘打って、商店街にアート作品を展示し、散歩しながらアートを楽しんでもらうイベントを企画するなど、商店街、来街者、作り手が入り混じって、「焼きもの文化のある街」を育む流れができてきたように感じます。

＞＞河本理事長
新しい世代の人たちと話すうちにわかってきたのが、賑やかしのイベントはあまり嬉しくないということ。一過性のイベントに力を注ぐよりも日頃の商売を大切にして、稼ぐ力をつけることが本来の商店街の姿じゃないかというのが、みんなの共通認識としてまとまってきました。それで銀座縁日や大売り出し、抽選会など、商店街主催でやってきたイベントをやめて、”いつもの暮らし”を大事に考えるお客さんに寄り添った商店街として、品揃えやサービスを向上させる方向に動いています。

外から来たからこそわかる、瀬戸の魅力を発信

＞＞河本理事長
この２、３年で新たにカスタム自転車店にカフェを併設した「ライダーズカフェ瀬戸店」や、本田さんの「リトルフラワーコーヒー」ができて、これが第三次活性化の波だと感じています。

＞＞本田さん
瀬戸との縁は、ライダーズカフェ店主のダビくんが、僕が大須で働いていたコーヒーショップの常連さんだったこと。ダビくんから、今度瀬戸に引っ越すから遊びに来て、と誘われたのがきっかけです。自分で店をやりたいと考え出していた頃ではあったものの、瀬戸には純粋に遊びにきたつもりだったのが、来てみたら商店街の人たちがあたたかく迎えてくれる空気感が心地よくて、その日のうちにここでやってみたいと気持ちが決まりました。SNSのマーケティングをしっかりすれば、都心や中心地でなくても人を呼べる時代なので、自分たちがやりたいことを丁寧に伝えて、生活の一部に馴染める場所がいいなと。

＞＞野杁さん
おしゃれなカフェができて若い人が来てくれるのはもちろんですが、本田さんのお店では、近所のお年寄りが週に何度も通う常連さんになってくれていることに驚きました。

＞＞本田さん
週に３、４回は来てくれる92歳のおばあちゃんや、ケアハウスからお散歩がてらグループで来てくれる方たちもいて、出店から１年半が経ちましたが、つくづくこの場所でよかったと感じています。縁もゆかりもない自分を受け入れてくれたからこそ恩返しをしたい気持ちと、外から来たからこそわかる瀬戸の素晴らしさをもっともっと知ってもらいたいという思いがあるので、まちを盛り上げるために挑戦したいことがいっぱいあります。まず、中心市街地の３商店街が一緒にやるイベントがないのがもったいないと思ったので、自分が発起人になってみなさんの協力を仰ぎ、３つの商店街のマーケットという言葉にかけて「SAN MA」というイベントを青の広場でこの秋に開催しました。スタッフはボランティアではなく、少額でも報酬が出る仕組みにして、来年は年４回、次は隔月といった感じで回数を増やし、長く継続できるイベントに育てたいと思っています。また１年以上かけて試行錯誤してきた瀬戸焼のドリッパーが近々完成するので、瀬戸焼の品質の高さを、世界のバリスタにも広めていきたいと思っています。

＞＞河本理事長
自分たちはイベントを手離したけれど、若い世代が新しいやり方でまた違うことを始めてくれるのは応援したいし、期待しています。

発行／愛知県経済産業局中小企業部商業流通課
企画・編集・デザイン／株式会社ナゴノダナバンク
藤田まや、市原正人（アドバイス）、髙橋幸大（サポート）
安井加奈子、鈴木真理（テキスト編集）、安達麻未（MAP）
イラスト／大角真子
写真（メイン、コラージュ）／ fujico
対談ライティング／北川裕子

2024 年 2 月発行

掲載情報は 2024 年 1 月時点のものです。